浅井　清　松井利彦
佐藤　勝　武川忠一
篠　　弘　吉田凞生
鳥居邦朗　編集

評論・論説・随想 II

第四巻

明治書院

研究資料現代日本文学
第四巻　評論・論説・随想Ⅱ　定価 4,100

昭和56年1月16日　初版発行

編者　浅井　清・佐藤　勝・篠　弘
鳥居邦朗・松井利彦・武川忠一
吉田熙生

発行者　東京都千代田区神田錦町1-16
株式会社　明　治　書　院
代表者　三樹　彰

印刷者　長野県長野市中御所町2-30
大日本法令印刷株式会社
代表者　田中　忠

発行所　株式会社　明　治　書　院
〒101　東京都千代田区神田錦町1-16
電　話　東　京　(292) 3 7 4 1 (代)
振替口座　東　京　3—4 9 9 1

© K, ASAI 1981
3391-25504-8305　製本　誠光社

はしがき

ある時代の文章は、そこに生きる人間精神の記録である。それはまず何よりも作品として存在し、その歴史的総体が広い意味での〈文学〉の実質を形成している。これが本シリーズを編纂した我々の基本的観点である。

従来、文学の名の下に扱われてきたのは、主として詩歌・小説の類であった。その多くは青春の歓喜や悲哀をうたい、象徴の森をさまよい、あるいはおぞき苦闘の告白を真摯に記したものであった。それらの作家と作品の研究が、今日めざましい充実と整備をみていることは周知の通りである。

しかし、文学が文章による当代の思想と感情の表現であるとするならば、それは単に詩歌・小説の類にとどまらず、その領域は広大なものと考えることができる。我々はたとえば画家の呟きに芸術創造の秘密を聞き、科学者のエッセイに現代社会への告発を読み、歴史家の文章に民族の運命を予感することができる。我々はこのような広義の〈文学〉によって自己の精神を形成し、我々自身の生きる時代の意味を明らかにしてきたし、またしつつある。それはまた国語教育が積極的に取り組んできた課題の一つでもあった。

『研究資料現代日本文学』全七巻は、近代・現代の〈文学〉というものを、言葉で表現された、そして同時代の思想情況を最も明晰かつ直截に伝えているものという観点から見直し、その著者と作品についてのこれまでの資料を集成整理し、現時点での意義を明らかにしつつ、今後の研究課題をも示唆しようとするシリーズである。編纂に当たっては、まず収録対象の拡大を試みた。すなわち、詩歌・小説はもとより、現代の知的散文、すなわち評論家、思想家、自然科学者、ジャーナリスト、芸術家、文学・言語学・歴史学・法学・経済学専攻の学者といった、さまざまな分野で活躍している人たちのエッセイや評論をも最大限に取り上げたことである。次にこれら

の対象を扱うに際しては、次のように配慮した。これまで研究成果のあがっている詩歌・小説については、現在の研究の最尖端の問題を視野に収めながら、作家論・作品論への展開に直接役立つ資料やその紹介を整え、現代の文章については基礎的資料の整備と読解・評価の手がかりを提示した。いずれの場合も、作者・筆者の人間形成、文学的展開については、その叙述が平板な羅列に陥らぬよう、それぞれの問題への視角を明示しつつ利用の便をはかったつもりである。

ここで取り上げた人名や作品の項目の選定に当たっては、近代日本文学史上重要な作家・作品はもとより、高等学校の教材あるいは大学入試の出典としてしばしば採用されるものを網羅すべくつとめている。本シリーズの性質上、時には文学史的価値よりは教材としての価値に重点が置かれていることもある。従って本シリーズは、教材研究、大学入試問題研究、さらには読書指導の資料としても活用することができるはずである。

各項目の解説には、研究・教育に携わる多くの方々の手を煩した。編者の意を諒とされ、快く執筆して下さった各位に厚く御礼申し上げる。終始助力と鞭撻を惜しまれなかった明治書院の小林美枝子・藪上信吾両氏にも謝意を表さなければならない。本シリーズが従来の評価・研究の動向をふまえた上で多岐にわたる現代の文章を新しい総合的視点から読み解き、指導するための指針として役立つならば、編者の喜びこれに過ぐるものはない。

昭和五十五年二月

編　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡　例

一、本巻は『研究資料現代日本文学』の第四巻、評論・論説・随想Ⅱである。本巻及び第三巻で評論・論説・随想のジャンルを取り上げる。

一、第三巻には、芸術、文学、哲学・思想、歴史学・民俗学・文化人類学、政治学・法学・経済学、社会学・心理学、自然科学の分野を収めた。第四巻には、文芸評論、国文学・中国文学、言語学・国語学関係の著作者やジャーナリストを収めた。個々の分野の中では生年の順に著作者を配列した。

一、著作物の性格上、厳密なグループ分けは期しがたく、右の分類は、検索の便を図るための目安にすぎない。

一、各著作者についての解説は、【人と主要著作】【主要著作解説】とからなる。国語教育や入試の際の重要度あるいは、研究のなされている主要な著作者については、適宜、【研究の動向】の項目を付した。

一、【主要著作解説】で取り上げた著作は、単行本を原則としたが、評論・随想等の性質上、個々の論文・随筆の場合もある。

一、評論・論説・随想Ⅰ・Ⅱでは、思想と文学に関する共同討議を行い、巻頭に置いて、資料理解の資とした。又このジャンルでよく使われる語句を取り上げて、簡単な解説を付し適宜挿入し、本ジャンルの作品理解に供した。

一、引用・出典の明示や、発行所・発行年月の厳密を期した。又、原典よりの引用は、〈　〉を付し、原典どおりの仮名遣いを原則とした。

一、新聞・雑誌・単行本名は『　』で示し、その他は「　」を原則とした。

一、年号の記述は簡潔を旨とした。（昭一五・六・二八）は昭和十五年六月二十八日を示し、（昭一五・六～八）は昭和十五年六月から八月を示す。

目次

はしがき……I
凡例……III

〈共同討議〉
続・思想と文学の接点を探る――今井淳・鳥居邦朗・佐藤勝……1

＊文芸評論関係
小宮　豊隆……38
大杉　栄……40
宇野　浩二……42
小林　秀雄……44
河上徹太郎……63
蔵原　惟人……65
中島　健蔵……67
神西　清……69
唐木　順三……71
瀬沼　茂樹……79
臼井　吉見……81
坂口　安吾……85
和田　芳恵……92
山室　静……94
亀井勝一郎……97
岩上　順一……105
平野　謙……107
山本　健吉……110
本多　秋五……120
花田　清輝……122
埴谷　雄高……124
保田与重郎……126
中村　光夫……129
吉田　健一……138
福田　恆存……140
荒　正人……144
杉浦　明平……146
佐々木基一……148
串田　孫一……150

長谷川　泉……152
佐伯　彰一……154
吉本　隆明……156
奥野　健男……158
川村　二郎……160
篠田　一士……162
竹西　寛子……164
栗田　勇……168
饗庭　孝男……170
高橋　英夫……172
秋山　駿……174
小田　実……176
桶谷　秀昭……178
江藤　淳……180
山崎　正和……189
西尾　幹二……198
柄谷　行人……200
＊国文学・中国文学関係
五十嵐　力……202
諸橋　轍二……204
山口　剛……207
高木市之助……209
石田　吉貞……211
岡崎　義恵……215
久松　潜一……219
頴原　退蔵……222
池田　亀鑑……224
風巻景次郎……226
笹淵　友一……229
吉川幸次郎……232
瀬古　確……240
松尾　聰……242
永積　安明……244
吉田　精一……246
高田　瑞穂……248
北住　敏夫……250
池田彌三郎……252
西郷　信綱……254
目崎　徳衛……257
尾形　仂……259
益田　勝実……261
秋山　虔……263
三好　行雄……265
＊言語学・国語学関係
吉沢　義則……267
橋本　進吉……269

金田一京助……272
西尾　実……274
石黒　修……278
時枝　誠記……280
楳垣　実……284
熊沢　龍……286
小林　英夫……288
岩淵悦太郎……290
波多野完治……293
遠藤　嘉基……295
山本　正秀……298
服部　四郎……300
平井　昌夫……302
大久保忠利……304
築島　謙三……306
大石初太郎……308
白石　大二……310
佐藤喜代治……312
金田一春彦……314
松村　明……319
阪倉　篤義……321
森岡　健二……323
柴田　武……325

大野　晋……327
永野　賢……332
林　四郎……334
宮地　裕……336
小松　茂美……338
渡辺　実……340
水谷　静夫……343
鈴木　孝夫……345
藤永　保……349
樺島　忠夫……351
芳賀　綏……353
斉藤美津子……355
＊ジャーナリスト関係
笠　信太郎……357
吉野源三郎……359
堀川　直義……361
むのたけじ……363
森本　哲郎……365
本多　勝一……367
荒瀬　豊……369
深代　惇郎……371

語句解説

アイディアリズム……197
アウフヘーベン……128
アフォリズム……342
懐疑主義……297
カタルシス……256
限界状況……128
行動主義……297
功利主義……206
コンプレックス……331
自己疎外……228
自我……96
主体性……318
人道主義……188
世紀末……271
絶対者……214
ダダイズム……271
抽象……188
抽象芸術……96
デカダンス……283
当為……256
ドグマ……342
ドラマトゥウルギー……137
汎神論……231
ヒューマニズム……109
普遍……292
プラグマティズム……228

共同討議

続・思想と文学の接点を探る

今井　淳（思想史）
鳥居邦朗（近代文学）
司会　佐藤　勝（近代文学）

有島・高村―大正教養派

佐藤　今回は前回に続いて同じメンバーでの座談会になるわけです。前回は白樺派の問題の入り口のところまで自然という論点からたどっていきましたので、改めて白樺派について、鳥居先生から問題提起をしていただきたいと思います。

鳥居　白樺派のかかえている問題を、自然主義の内なる自然、つまり欲望という形にいちばん近い形で考えているのは、有島武郎の「惜みなく愛は奪ふ」（初稿『新潮』大六・六）ですね。つまり彼は〈本能〉という言葉を使っているわけです。あるいは自然主義の岩野泡鳴と〈霊肉一致〉の論争をやるわけです。ところが、そこで有島は、非常に苦しい思いをしながら肉を肯定しようとする。〈本能〉と有島が言うときには、これは〈霊肉一致〉と考えている。生物学的な本能とはちょっと違うんですが、そういう形でなんとか肯定しようとするところが有島の場合にはあるわけです。

それから高村光太郎が考える〈内なる自然〉というのは、単なる欲望ではないんですね。つまり普遍的な自然がそれぞれの個に表れる形、それが自然なんで、自分の内部にもある。だから自分の内心のいちばん忠実な声に誠実に生きることが、普遍的な自然に従って生きることであり、それを通じて個が普遍につながるという。高村光太郎がロダンから直接譲り受けてきたそういう見方があって、これは武者小路の〈個に徹することによって人類の意思につながる〉という言い方と同じものを持っているわけです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だから〈内なる自然〉を、自分の内部にある単なる欲望というふうに対象化してしまうのではなく、むしろ普遍につながる形でそれを主体的につかまえようとする。そういうものが、幻想か何か知らないけれども、『白樺』のある時代にあった。それが独歩や蘆花の場合とどういうつながり方をしているのかということが、本当はいちばん気になるんですよ。

今井　こういうことは言えませんか。これはむしろ質問なんだけれども、鳥居先生のお話と関連して言うと、自分の内なる自然、つまり欲望とか霊肉の肉のほうに徹すれば逆に普遍につながるということは、あえて言えば素朴な信頼みたいなものとか楽天的なものがあるかもしれない。ところがそれもダメだとなったら、そこから〈あきらめ〉の問題が出てくるんじゃないですか。つまり、いくら格闘したって、自然と人間との関係はどうにもしようがないから、と。

鳥居　『白樺』の場合は、その〈あきらめ〉のところに行かないわけです。

今井　ええ、行かないですね。むしろ人間万歳的なところへ行く。ヒューマン・ネイチャーをそのまま出せば、伊藤整じゃないけれども、愛の虚偽に引っ掛かってうまく解決できるわけです。

佐藤　『白樺』の人たちの主観においてはそうだけれども、客観的な構図としてはやはり〈あきらめ〉じゃないですか。

今井　最後はそうですね。だけどそういう感じがもういっぺん出てくる可能性はあるんじゃないですか。

佐藤　だから『白樺』の場合だったら、彼らが〈自然〉と言い、〈人類〉と言っているときに、それを一定の普遍的な抽象概念としてわれわれは了解することができるし、そういうふうに彼らが考えているであろうという理解もできる。けれども、それでは彼らが言っている〈人類〉なり〈自然〉なりが具体的にどこにどうやっているかと見ると、それはいないわけですよ。

鳥居　そこで話を大正期教養派のほうへずらしていくと、今言ったような、たとえば武者小路が自分の自我を、個の意思が普遍の人類の意思へつながるというような形でとらえた。そういうとらえ方と、たとえば阿部次郎が人格主義と言ったときの人格というものと、何かある共通性みたいなものがあるわけでしょう。

今井　たとえば大正の場合、今挙げたような人格主義でいけば、人格の普遍性というもの、カント流のそれは完全にあるわけです。

鳥居　それはわれわれの言葉で言えばヒューマニティーという言葉になるかもしれないけれども、そういうものをある種の普遍的なものと信ずる、というか、そういうものを向こうに見通したときに、人格主義とか教養主義というものが成り立っていくということです。

今井　だから大正の教養主義というのは、その意味での普遍を追求するということが言えるわけですね。

自然主義の時代の必然性

佐藤　そういう人格主義にしても大正教養主義にしても、特殊具体的に自分の周りに日常的に存在する敵との間の格闘を、

それとして追求するということはないわけですね。

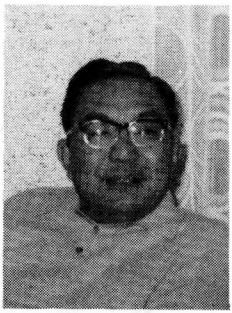
今井　ある意味ではなくなっちゃうんですね。欠落しているんです。

鳥居　時にはしいて切って捨てないと……。

今井　それをやったらまとまらなくなるんです。

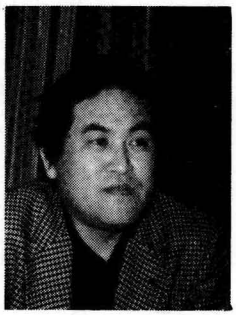
佐藤　いや、それをやらないと自然主義は超えられなくなるんです。自然主義は、今度は逆にそういう特殊具体的なところにこだわるわけでしょう。しかもその特殊具体的な個々の中に美なるものはおよそない、醜悪にして矮小なるものしかない、というようなところがある。そこに自然主義はこだわっているから、そこを突破するためには無視するしかないわけですよ。

今井　しかし、なぜあの時に自然主義というのがそれほど文学運動として大きな潮流を成しえたか。もちろん思想の問題にも関連するけれども、明治四十年代になぜあれほど大きい潮流を成しえたかということですね。花袋の「蒲団」（『新小説』明四〇・九）が明治四十年でしたか。



今井　淳氏

鳥居邦朗氏



佐藤　勝氏

鳥居　非常に素朴な実感としてわかるのは、たとえば藤村が〈ああ、自分のような者でもどうかして生きたい〉と言ったように、そういうことを考えなければいけない時代になっていたということがあるんじゃないですか。

佐藤　そのとおりですね。つまり小説家が描くべき世界が作家の主体とどう結合するのかということが、江戸文学の伝統以来だんだんわからなくなってきていたわけでしょう。どんなにうまい小説家でも、そこのところがはっきりしない。たとえば広津和郎のお父さんの柳浪なんかは素晴らしくうまい作家ですよね。しかし彼は、ある小説集の「まえがき」に書いているけれども、自分は登場人物に涙したことはないと言っているんですね。そうすれば描写法は非常に精緻になっていきますよ。そして自分と無関係なところでの現実の人間に対する見方、つかみ方というのは、非常にトリビアルなところまで細かくなっていくけれども、問題は、自分はなんで小説を書いているんだというその問題が解けないということです。（笑）

だからやっぱり藤村が言うように、〈ああ、自分のような者でもどうかして生きたい〉ということが、小説を書くということのいちばん基本にすわってくる。これがかなり潜在的な欲求としてあったんですね。それはただ単に文学的関心というものではなくて、明治の後半の時代を多少とも知的なところとのかかわりを持って生きようとしている人間には、そこのところをなんとかしないともうどうにもならない、という状況が客観的にあったと言えると思います。そこに自然主義という言葉がダシに使われたということではないでしょうか。

今井　それはあるでしょうね。

佐藤　だから田山花袋が主筆をする雑誌『文章世界』を例にとってみると、彼らにとって最大の仮想の敵は鷗外みたいな人なんですね。鷗外が「あそび」（『三田文学』明四三・八）という小説を書くと、すぐに〈あいつは遊びだ〉とやるわけですね。鷗外はまたそれを見事に切り返しますけれども。

今井　その問題はある意味では、〈自分のような者でも……〉というのは自分の問題でしょう。中村光夫の形でいくと、やはり私小説というのがそこで意義を持ってくる。つまり自然主義の流れの中で、今度は私小説というのがメインになってくるわけですね。

鳥居　そう行くと自然主義と白樺派が意外にあまり遠くないことになるんですね。

佐藤　つまり自然主義のあとに白樺派があるから、私小説が成立するんですよ。

鳥居　それはそうですね。

佐藤　これが片一方だけだったら成立しないんです。

今井　それと私小説というのは読者からすれば面白いものね。（笑）

佐藤　まあそれはあまり中村光夫的意見ではありませんけれども。（笑）

大正ヒューマニズム—内村門下を視座として

佐藤　今までの話の文脈の中で大正ヒューマニズムというのはだいたいつかまえられるだろうと思いますが、やはり大正期というのは、思想史の側から言うとヒューマニズムの時代じゃないですか。

今井　そうですね。明治の、特に前回に話のあった初期のクリスチャンはいい例だけれども、愛国者だ何だかんだと、ものすごいですね。つまりナショナルなものをどこで求めるかというのが明治ではテーマにならざるをえない。日清・日露戦争がそうだったしね。だけど大正の場合は、いっぺんそれが拡散するわけでしょう。ナショナルなものが解体していくわけですね。

鳥居　その場合にこれまで触れなかった内村鑑三門下の問題があるわけです。内村鑑三門下がやはり大正期教養派につながるような代表的な精神だろうと思うんです。

現象的に面白いと思うのは、戦後日本の一時期、思想的なオピニオンリーダーだった人たちには、その流れをくんでいる人が非常に多いわけですよ。矢内原忠雄にしても……。

今井　南原繁にしてもね。

鳥居　そのへんで内村鑑三門下とヒューマニズムとの関連はどういうふうに説明できるんでしょうか。

今井　ぼくも神学の理論はよくわからないんですが、鑑三というのは例の『聖書之研究』（明三三創刊）という個人雑誌を出している。初期には彼なりのナショナルなものとか日本というようなことでやっていたのが、だんだん最後は孤立していくわけでしょう。そして『聖書之研究』などで自分のパーソナルな信者を相手にお説教をしたりするという形をとっていった。ある意味では異端者だったわけですね。

結局彼らは、ヨーロッパの伝統的な神学理論と違う新しい神概念を作り上げていく。今鳥居先生がおっしゃったことと結びつけると、今度は例の初期の〈二つのJ〉的なものではなくて――もちろん鑑三はパッショネートだから、それが最後まで残ったろうと思うけれども――もっとヒューマンネイチャーみたいなものに行くんですね。鑑三は非常に気性の激しい人ですし、喜怒哀楽が激しかったということがお弟子さんの本を読むとよく出てきます。そういう人格的な面での、ものすごくパーソナルな形で南原繁や矢内原忠雄が結びついたわけですね。極端に言えば内村信者といってよいでしょう。

ちょうど時代的にはあとで、例の昭和初期にみんな弾圧を受けたわけですね。いろいろパーソナルな影響を受けて、しかもそのパーソナルなものが、初期の天皇制とか国家ということと矛盾するわけでしょう、パーソナルであればあるほどね。

だからヒューマニズムの問題というのは、いっぺんギリギリのところまで行かないと出てこないというのが、内村グループの考え方ではないでしょうか、オリエンテーションとしては。

佐藤　しかも論理の儀表としては、人間性という普遍的なものを表に持っているわけでしょう。

今井　そうですね。

佐藤　そして、いつか鳥居先生が言っておられたように、戦後派の文学のオピニオンリーダーだった雑誌『近代文学』によった人たちは白樺派じゃないかということがある。つまり、白樺派のような普遍性――あるいはヒューマニズムならヒューマニズムという普遍的な概念――を信ずるということ。そういう中でないと新しい価値観形成の媒体たりえない、ということが戦後にあるんじゃないですか。それが南原繁とか矢内原忠雄といった人に体現されているということはないでしょうか。

だからやはり大正期のヒューマニズムというのは、明治の四十五年を経過してくる中で、どうしてもいっぺんそこへ来ないと次の状況が探れない、ということがあったんでしょうね。

〈転換期〉はありえた

佐藤　次に今井先生に伺いたいのは、文学史家のほうでは、関東大震災のころから、つまり大正十二、三年ごろから昭和三、四年あたりまでのところを〈転換期〉という言葉で説明するのが通例なんですね。それを思想史の側から見たときに、そういう言い方は妥当性があるんでしょうか。

今井　これは難しいですね。

佐藤　ぼく自身も〈転換期〉という言葉を便宜上使いはするんですが、使いながらも確信がないわけですよ。

鳥居　思想史上、大正と昭和というのをある程度説明できるような論法があるんですか。

今井　大正から昭和へ年号が変わるからそこで区切りがついたように見えるけれども、実際は思想史上では区切りがつかないんですね。つけるとすれば、むしろ昭和七年、八年あたりのところでしょう。そこで大きくメルクマールとして変わるような気がします。

佐藤　それはそうなんです。ただ、参考までに申しますと、大正十二年関東大震災がありますね。このときに、ぼくらが通常想像する以上に、芥川とか菊池寛あたりは危機感を持つわけです、芸術の永続性はもう信じられない、と。ところが他方、横光とか川端の世代になると、それをすごく面白がるわけですね。この差を単純に世代の差というふうに言っていいのかどうかということです。つまり一方はちょっと中年になっていて、他方が若いからそうだ、というふうに言っていいのかどうかということがあるわけです。

さらにその背景として、つまり社会的な一種の土壌として、たとえば雑誌『改造』とか雑誌『解散』という、およそそれ以前には考えられないような表題を持った総合雑誌が、大正八年に出てくるでしょう。そのあたりでそれに類するマイナーの雑誌がいっぱい出てきますね。

大正末期というのはそういう一種の世代交替期を反映していろんな雑誌が出てきます。同人雑誌も出てくる。それから各種論争がものすごく盛んで、この時期は論争の季節ですよね。そういう現象全体を通じて、他の時代における世代交替期と違う本質はないのかということをちょっと考えてみたりするんですが……。

大正芸術至上主義への反省—昭和へ

鳥居　そういう話をすると、たぶん大正十一年の有島の「宣言一つ」からということになると思うんです。つまり「宣言一つ」は、第四階級の時代が来ることを必然として認めた上で、結局自分はブルジョアでしかないと言う。広津は、そんな窮屈なことを言うなと言ったけれども、あれが大正文壇人の新しい時代に対する動揺のいちばん象徴的な表れだろうという気がしますね。

その後、芥川などのいわゆる大正文壇の文学に対する反省の形で、たとえば広津和郎の「散文芸術の位置」（『新潮』大一三・九）が出て、芸術的完成という問題のほかにもう一つ、すぐ隣りの人生にかかわらざるをえないということが、たとえば愛山・透谷の〈人生相渉論争〉以来と言ってもいいかもしれないけれども、問題になってきた。あるいは菊池寛と里見弴の〈内容的価値論争〉とか〈作家凡庸論争〉があった。つまり菊池寛に言わせれば、芸術的価値以外にもう一つ内容的価値があるだろう、あるいは作家というのは必ずしも天才ばかりがなるのではない、という言い方で、ぼく流の言い方をすれば、大正期風の芸術至上主義に疑問を投げかけている。その背景には、さっき話題になった人格主義・教養主義があると思うんですが、そういうものに対して大正文壇自体の内部で、それはまずいのではないかということが起こってきていた。そこへ関東大震災

が起こる。

横光・川端の感覚で言うと、大正末期というのは、ちょうど高度成長期の日本のように、文化住宅、文化なべ、文化、文化ということで都会化、スピード化がものすごく進んでくる。そういうものについて行くには、もう大正期風の芥川なんかの芸術ではダメなんだということがあるわけですね。

そういう社会現象的なものと文学とを結びつけて考えていくと、確かにその時期は非常に大きな変わり目だなということを感じるんですね。

佐藤　今言われた大正期の芥川的な芸術至上主義を支える根底に、さっき話が出てきたヒューマニズムというものがあるんじゃないですか。

鳥居　そうですね。

佐藤　近代日本人にとって最も異質な、しかし異質であるがゆえに最もショッキングなものとして入ってきたものが、明治期のキリスト教と大正期に入ってきたマルクス主義だと思うんです。そのマルクス主義が入ってくる。あるいはマルクス主義と言わないまでも広範な意味での社会主義が入ってくる。そして有島のような受け取り方もあるし、芥川だってそれを一つの歴史の必然として受け取っているわけでしょう。

鳥居　と言うのが普通ですね。

佐藤　そういう当時の知識人の受け取り方によって、大正ヒューマニズムの基盤が洗い流されるおそれが出てきているわけでしょう。つまりヒューマニズムそのものが存立の危機を迎えているわけですね。そういう状態が、文学に限らず当時の思想状況にある一定の大きな影響を与えているのではないかな、という気がするんですね、ぼくは。

普遍的なものの段階的拡散

鳥居　そのへんの問題で、もう少し時代はさかのぼるけれども、ぼくが文学のほうで一つ気になるのは、〈民衆芸術論〉です。〈民衆芸術論〉を最初本間久雄あたりが言いだすときの考え方は、むしろ教養主義的な考え方ですね。つまりヒューマニズムが民衆に対して教養を与え、民衆を高め、救うというふうに考えているわけです。ところがそれはあっという間に、そうじゃないということになってきますね。だから思想史のほうでも、民衆と知識人の断絶みたいなものが問題になるような場面がありはしないかと思うわけです。

今井　それはマルキシズムの問題になるわけでしょうね。つまりこちら側は労働者あたりの実践運動に飛び込めない。そういうインテリゲンチャですね。

佐藤　有島の場合を裏返していきますと、マルクス主義が日本に導入される仕方の中には非常に日本的なプロセスがあると思うんだけれども、基本的にはまず教養として、知識として導入される。それが大正初頭の場合には、たとえば大杉栄とか荒畑寒村のような人間によって、主体抜きの導入は駄目だという雑誌『近代思想』のような運動になった。それがいかに彼らなりの主体論を持っていたかということの証拠は、彼ら自身が、『近代思想』という雑誌の運動を〈智識的手淫〉だということで自己否定するわけです。そういうところによく現れてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com